

# 夢 塾 だ よ り

## ～ 少 年 時 代 ～

(第 77 号) 令和 5 年 12 月 21 日

私の小学校時代、読谷線バスターミナルには、二つの食堂がありました。その名もターミナル食堂とセンター食堂。ある年の暮れ、嘉手納の街（当時は読谷から一番近い街）にお正月用品を買いに母につれられ、バスを降りて、初めてセンター食堂で食べたのが「そば」。あまりのおいしさに「こんなにうまいものが世の中にあったのか。」と思いました。その味、香りまでも脳裏に残っています。



3年後、中学生になった私は嘉手納町の若竹食堂で「オムライス」を初めて食べました。オムライスを作るたびに若竹食堂の味を思い出します。2年前名古屋で食べた超有名店のオムライスはどうってことはありませんでした。ちなみに母は料理が得意ではありませんでしたが、思い出す母の味は「フーチャンプルー」です。

そんなわけで少年時代の『食』はその後の人生の味覚を大きく左右します。

いいえ、味覚だけではありません。少年時代こそ、その後の人生の大半を決める大切な時期なのです。

私の大きな転機は、中学2年の後半、成長期に背骨が急に曲がる奇病になったことです。当時は珍しい病気で放っておくとせむしになると言われ、兵庫県にある整肢養護施設に1年半入院生活を送りました。ですから中学校は特別支援学校の卒業で、身体に障がいのある仲間たちと長い時間生活を共にしました。闘病のため、高校へは1年遅れて兵庫県にある県立高校に入学しました。

闘病時代学んだことは、人のやさしさでした。人の温かさでした。高校時代学んだことは劣等感にまけない強さでした。

夢塾に来ていただいている「少年」の貴重な時期のお供をさせていただくことを、いつもありがたいと思っています。今年も多くの子供たちとふれあい、しゃべり合い過ごせました。ありがとうございました。

皆さま、来年も良いお年をお迎えください。